



見送る知覧高女（毎日新聞社提供）

ある。贈り主の名前らしい、女性の文字が人形の胸元に記されている。

これは、看過できない、何か決定的・本質的なことの特徴ではないのか。

そう私には思えた。

こうした人形はこれだけだろうか。同じように女性の名前の入ったマスコット人形が、特攻隊員に贈られる風習のようなものがあつたかもしれない。だとしたらこうした人形はどんな状況でどんな処遇を受けていたのだろうか。予断はいけないと思いつつも、ひよっとしてこの人形を首からかけて胸にしまって出撃したとか、そんな風だろうかと想像しながら展示されている写真をあらためてじろじろ見て回つたが、探し方が悪かつたのか、人形と特攻隊員の取り合わせの写真は見つからなかつた。

ところが、退館するときに販売コーナーで買った『知覧特別攻撃隊』という冊子に、あつた。隊員たちが、たくさんの人形を手にくく持っている写真と、服装からして明らかに攻撃直前の、年若い隊員がこの小さな人形と仔犬とを胸に抱き、ほがらかに微笑んでいる写真があつた。昭和二十年当時、女子勤労奉仕隊員として特別攻撃隊を担当していた知覧高等女学校三年、十五歳の前田笙子の日記が同書に引用されている。

そして新聞は、隊長関行男大尉の精悍な表情の写真を付し、「神鷲の忠烈萬世に燦たり」等の見出しで大々的に報じ、日本列島を震撼させたのである（サンデー日本七九号）に翌日の朝日新聞の記事掲載あり）。人々は感動した。その感動が、列島に住む人々を、心底「大日本帝国国民」にしてしまった。

最初の問いに戻るが、特攻隊員たちは、なぜニコリ笑うのか。全員ではないにしても、笑顔の写真もまた驚くほど多い。

いづれ特攻隊も、いわゆる「歴史」になり、「伝説伝承」になる。そうなる前に、特攻隊員たちが生身で味わった世界転換に、できるだけ迫ってみたい。ほとんど無駄な努力とは知りつつ、想像力の及ぶ限り、彼らの生きた遊働世界を、イメージしてみたくなつてしまった。

人形を抱く特攻隊員

幸か不幸か著名となつた知覧の、特攻平和会館でさまざまな遺品を見学していた時に、妙なことでぎくつとした。

陳列されている隊員たちの遺品の中に、手のひらサイズの、モンペ姿の女学生風マスコット人形があつたので



出撃前仔犬と遊ぶ特攻機の若桜
（『知覧特別攻撃隊』ジャブラン、1989より）

三月三十日 今日の出発なさるとのこと。朝早く神社の桜花をいただいて最後のお別れとして私達のマスコット人形とを差上げる。無邪気に喜ばれる。

（『知覧特別攻撃隊』七七頁）

あの、桜の花で操縦席を飾り、出撃する隊員たちへ花枝を振るその前に、少女たちは自分たちをかたどったマスコット人形をたくさん作り、隊員たちへ渡すということをしていたのである。無邪気なのは彼女たちの方で、日記の他の部分を読むにつけても、単純に「軍神」たちへの畏敬と憧れと感動とにあふれ、このように人形を贈る行為が、何を意味するかはまったく考えていない。

ということやはり、マスコット人形を特攻隊員に渡すという行為自体、一般的というか儀礼的というか、決して特異なことではない背景があったのだろう。

神風特別攻撃隊大和隊員として、フィリピンの子島から出撃し戦死した植村貞久(二十五歳)の、愛児への便りとした遺書に、こうあった。

植村素子へ

追伸 素子が生れた時おもちやにしてゐた人形は、

お父さんが頂いて自分の飛行機にお守りにして居ります。だから素子はお父さんと一緒にゐたわけですよ。

素子が知らずにあつたから教へて上げます。

〔雲ながるる果てに〕十四頁

ならぬ世界に拉致されていたのではなからうか。

『特攻基地知覧』の語るところでは、軍事旅館周辺の料亭には慰安婦(日本人かどうかは不明)もおり、軍属関係者の利用客も多かったというが、「きれいな体のまま死にたい」という若者もまた、少なくなかったらしい。これを青年たちの強靱かつ清しい理性に律せられた態度とみても、まちがいではない。しかしそれ以上に、生身の女人よりもいっそう切ない恋慕の闇に、人形は導いていたのではなかったか。

「童貞のまゝ」出撃する「損な奴」とは、句作者自身のことでもあろう。現実には女を知らずに死ぬのは「損」かもしれないが、ここにもまた、この世に想いを残すという霊的関係の構築があると同時に、煩悶するがゆえに、無限に深く、果てのない恋愛宇宙と、ひとつになつていた心象風景が、見出せるのである。どうも、特攻隊員たちの感情からは敵国への憎悪とか軽蔑などの要素が霧消しており、あらゆるものへの純粋な愛欲が満ちていたように思われる。「諸共と思へばいと此しらみ」(『雲ながるる果てに』一五九頁)もまた、単なる諧謔ではあるまい。

手のひらサイズの人形は、妖艶なる「愛と平和」の巷へと、陥れてくれるものであった。

もとより死ぬ予定の人であるから、「お守り」とは、命を助かるうという意味ではない。「だから素子はお父さんと一緒にゐたわけ」と述べるごとく、人形は文字通り、その人そのものとしての「人形」であった。親子のいつくしみを霊的次元でまじわらせる生命指標が、ここで言う、「お守り」なのであろう。

神風特別攻撃隊第三御楯隊員として鹿児島県の国分基地から出撃し、南西諸島に戦死した人たちの中に、自分たちの出撃前に川柳百句を合作した二十三歳の四人組がいた。及川肇、遠山善雄、福地貴、伊熊二郎の連名であるが、どの句をだれが作ったかは不明。その中に次のような作品があった。

人形を抱いて寝てゐる奴もあり

人形へ彼女に云へぬ事を云ひ

童貞のまゝで行つたか損な奴

〔雲ながるる果てに〕一五八〜一六三頁

特攻隊員が人形を抱くのは、知覧に限った話でないことはこれで明白である。支給されたものか、実際に恋人からもらったものかは不明だが、自分の密(ひそ)かことをささやき、夢の間(ま)にまで引き連れて行く対象として、それはあった。いや、人形によって、隊員たちはすでに、この世

先ほどの父親の場合も、実は人形が、我が魂を幽冥界へいざない導く守護者であると感じることで、「お守り」としていたのではなからうか。

空翔ける恋

出撃時の特攻隊員のいでたちについて、次のような描写もある。

隊員は、飛行服の上から、濃い緑色の縛帯をしめていた。その胸のところには、隊名、階級、氏名などを記した白い布を縫いつけている。飛行帽の上から、血染めの日の丸のついたはちまきを固くむすんだ者も多かった。えりや腰には、贈られたマスコット人形を、いくつもさげているのが、悲壮ななかに、ほほえましい色どりになっていた。だれもが、紅顔の若者であった。(『特攻基地知覧』二七九頁)

報道班のカメラマンは、この、飛行服に人形をチャラチャラぶらさげた若き特攻隊員の姿を、写真に撮らなかつたのであろうか。特攻隊の写真資料を私なりにいろいろ探してみたのだが、皆無である。

もちろんこのような「軍神」の写真は、報道用として

は検閲ではねられるであろうが、撮っておくことすらしなかったのか、それとも撮影自体許されなかったのか。はたまた高木俊朗が虚偽の描写をしたのか、今のところ確かめるすべがない。

しかし、十七歳からの隊員もいるわけで、今で言えば高校生の年頃である。精神年齢に違いはあるかもしれないが、現代の高校生たちが、カバンやケータイに人形ストラップをたくさん吊り下げているのは、あんがい霊的なものとの交渉を感じ取った、長くて深い心意伝承によるものではないかとも、思えてしまうのである。

「血染めの日の丸」とは、これも高木の記述によれば、女学生たちが「たちものばさみで指をきって、したたる血を、皿に受けて、筆で書いた」（『特攻基地知覧』八七頁）ものであるようだ。こうしたものの写真はある。

『別冊一億人の昭和史 特別攻撃隊』二一八頁に掲載されている。寄せ書きのされた血染めの日の丸を囲むようにして見入る神妙な顔つきの特攻隊員たち。白黒写真だが、濃淡にむらのある日輪の部分が、生々しい生き血のおいまで発しているかのようだ。「知覧高女の女子学生が血染めの日の丸を振武隊員に贈った 中には特攻機に同乗し 敵艦にいっしょに突入したいと熱望した人もいた」という説明が付されている。

親類でもない、職務上行き会ったばかりの赤の他人ともにも散華しようという気概が生ずるとは、もはや同じ文化・民俗を共有する者たちにとっても、理解を越えている。ただ、男が死に向かって生きるという時に、まるでそのバランスを取るようにして、女にも生き方のギアチェンジがされたのかと、想像するばかりである。

一緒に死なないまでも、我が血を贈り、念を込めた人形を贈るのは、恋愛感情の表現としても、究極形態に達していない。平時とは異なる切迫した状況の中で、通常の感覚が麻痺したという見方も、できなくはない。しかし、この場合、羞恥感覚が麻痺したのではなく、むしろ積極的に、血も肉も浄化されるような恋愛関係に、結ばれたのである。「あの人」「この人」でなければ、といった区別や執着を超え、すべての互いが結ばれて、何の淫らさもない、純粹な恋愛宇宙である。

人形を抱いて死への飛行を行なう。
それはそのまま、虚空にさらされ、虚空にまぐわう生きさまであった。

ある特攻隊長が、体当たり際に際しては、「地球を抱いてぶつ倒れろ」と隊員たちに述べたと言うが（『雲ながらる果てに』一二七頁）、それなどは氣宇壮大な訓示というよりも呪言であり、艶話ですらあったのではないか。



女子学生によって贈られた血染めの日の丸（『別冊一億人の昭和史 特別攻撃隊』毎日新聞社、1979より）

このことも確かめようのない話ではあるが、まんざら誇張でもないと思われる。我が血で染めた着用品を贈るとか、人形を贈るとか、それが男女の間で行なわれることは、どんなに鈍い頭で考えても、かれらの関係になまめかしさを思わずにはいられないだろう。それが世俗の色艶に手を染める場合の羞恥心やためらいを飛び越えて、決然と行なわれていることに、瞠目せずにはいられない。

実際に妻が夫の特攻機に同乗してともに散った例もあり（『別冊一億人の昭和史 特別攻撃隊』二二一頁）、それもまた激しい愛の形には違いないが、夫婦でも恋人でも

地球そのものを、あるいはこの世にあるすべてのものを、恋愛の対象のように挑み、まぐわえ、ということでもある。

生き別れてきた恋人や妻への恋。父母きょうだいや子どもへの恋。師友への恋。慰安婦も含む我が身の「庇護者」への恋。そして、敵艦への恋。

分別見さかしくなく、ゆえにこそ純粹で、一途な恋。恋は「乞い」と同根の語であり、魂乞いをする事だと折口信夫は言う（『戀及び戀歌』『折口信夫全集 第八巻』所収など）。「末期の目」には、すべてのものに、乞うべき魂・命が見えていたかもしれない。艶色までも、感じ取れていたかもしれない。そんなことを思いながら、あらためて、本誌一九三頁図版、人形と仔犬を抱く特攻隊員の写真を見つめなおした。
人形に添えられた一本の指。気が付いてはいたが、深く考えていなかった。ここから考えてみる。

命を継ぐもの

この少年の右手は仔犬を抱えている。浅黒く細めの指。人形に添えられた指は、恐らく彼のものではない。見た感じ右手の人差指で、白くふくよかだ。女性の手なのだ

ろう。カメラの角度からして、この画面の左側の方に、この指の主はいるのだろうか。そう考えると、画面の枠からはみ出して腕が伸び、その女性の輪郭がすかし見えてきそうな気がした。と、写真の左端を見て、ぞっとした。

若い女の、おでこ鼻と上唇だけがのぞいている。いや、ぞっとしては失礼かもしれないが、ぞっと背筋に戦慄が走るような色気を感じた。

いったい、この写真はもともとこれで一枚なのだろうか。それとも、もっと広い範囲で撮影されていたものの一部を、切り取ったものなのか。

いずれにせよ、若い女の姿はカットしようとしたのだろう。にもかかわらず、女性の先端だけがかすかにのぞくことで、この写真はぞっとする色気に縁どられ、立ち上がってきたのである。

生身の女体は気配だけをかもし、その情念を込めるように、白い指が女形のマスクット人形に添えられ、少年の胸に抱かれる。少年にとつて、この人形は魂を持った妻となる。やわらかく温かい仔犬は、その妻と我が身との間に授かる新しい生命の感触である。そうした、異次元の未来の、記憶である。

死に行く少年の笑顔がこんなにもほがらかなのは、このような呪的世界も一つ未来に、溶け込んでいた

お母さん お母さん お母さんと

〔知覧特別攻撃隊〕四五頁

この「お母さん」は、戦後子どもを産んだだろうか。あなたとまぐわい、あなたの実子として生まれたかった彼の心が、届いただろうか。

戦後の日本で、進駐軍兵士の子どもたちが少なからず誕生した。

このことについても、日本人が被害意識をむき出しにして、賠償請求を連合国側にしなかったことが、当時を知らぬ者としては不思議であった。

もちろんそうしなかったであろうし、とてもできる状況ではないから泣き寝入りし、現実を受け入れて母親たちは子どもを養育し、子どもたちも生きてきたには違いない。

しかし、それだけではないとも、思えてきた。

「逆縁」であれ、日本兵が激しく闘ってきた敵には、すでにして亡魂亡霊が宿っている。特攻という、広大無辺の恋を生き切ることのできてしまう若者たち、その同じ遺伝子を持つ他の兵士たち、一般の人々の、靈魂に取り込められた者は、現実が敵であっても、愛する人の仇であっても、「私」たちの魂を、命を継ぐ者たちなので

からに違いない。その瞬間をとらえたこの写真も、写真史上における奇跡なのであった。

以下個人的妄想である。

この写真を縁取る女体は、少年にとつての妻・恋人でもあり、母でもある。母が息子に女を与えるようでもあり、自らが人形に憑依して少年の妻になつていと言つてもいい。要するに女の性の種々相に縁どられた写真なのである。実際は、この女性が赤の他人であったとしてもだ。

特攻隊に関与する人々の間では、現実の秩序、関係が崩壊し、混んとした雌雄関係から新たな魂のありようを、人々はわが胸に宿し、生長させていったことだろう。

特別名文ではないが、継母への想いを訴える魂の叫びが、その文字の発する霊威が、どうしても私の脳裡から離れないものがある。

俺は幸福だった

遂に最後迄「お母さん」と呼ばざりし俺

幾度か思い切つて呼ばんとしたが

なんと意志薄弱な俺だったろう

母上お許し下さい

さぞ淋しかったでしょう

今こそ大声で呼ばして頂きます

あった。

戦後の日本女性は、蹂躪じゅうりゅうされつつも、父・夫・恋人・息子と命のやり取りをしてかろうじて生き延びた彼らから、魂・命を継いだとも言える。だからこそ、金髪、青い目の子どもたちをも本当に愛し、育てる母親たちもいたのだと思いたい。

古いにしへから伝わってくる人間の心のありさまや伝統を、危険な不発弾や地雷のごとく除去しようとしてきたことや、その行き過ぎが誤りであることも、私たちは知り始めている。それでも「私」たちの歴史にたいして、どう手をつけるべきか途方に暮れる状況も呈しているのだ。若い女性たちが元気に「戦国萌え」「歴史萌え」しているのを、苦々しく見ていること自体、その反映に過ぎない。そんな中で、青い目の日本人から、あるいはこの風土に脈打つ魂を求めて渡来した人々から、「私」たちの心のありようを教えられることも多い。

心意伝承は、血液という物質を媒体として伝播するのではない。感覚や、かく生きようとする気持ちがある限りは、枯渇するわけでもない。民族、遺伝子の違いをも超えるであろう。

「私」たちは、生きる。数値目標の達成のためではなく、同時代の者だけで孤独な生を営むのでもなく、連綿

と受け継がれてきた古人たちの心、そしてこれから生まれてくる子どもたちの魂とともにあることを感じつつ、生きてゆく。

「私」たちがどうしても求めてしまうものを考え、感じ、味わい、識ることを、次の命へと継ぐ。

つまり、死にゆく。

そのように、生きる。

太平洋戦争関係参考文献

『神風特別攻撃隊』猪口力平・中島正共著 一九五一年 日本出版

『雲ながるる果てに 戦歿飛行予備学生の手記』白鷗遺族会編 一九五二年 出版協同社

『サンデー日本』七九号 一九五八年十一月一日発行 東日本新聞社

『特攻基地知覧』高木俊朗著 一九七三年 角川文庫（知覧）一九六五年 朝日新聞社の改訂版

『わがいのち月明に燃ゆ』林尹夫著 一九六七年 筑摩書房

『戦藻録』宇垣纏著 一九六八年 原書房

『遺稿 魔の海峡に消ゆ』長門良知著 一九六八年 大光社

『地のさざめごと—旧制静岡高等学校戦没者遺稿集—』一

モノローグ 独白—空のよるめきに遊び続ける

間もなく夜が明ける。今年の桜はまだ咲き誇っている。

満月も美しい。見上げていて胸苦しくなるほどだ。さて約束通り、編集部に原稿を送信しなければならぬ。

結局、着地できなかった。着地するすべも見つからなかった。最終回というのにひどいことだ。まるで子ども

の時にぐるぐるまわって目を回し、草原に大の字になって空がよるめいているのをけらけらと眺めていた、あの

状態から抜け出せなくなったようなものである。こんな終わり方でよいのだろうか。

日付が変わって四月十一日。心意伝承研究の先師上原輝男博士が逝った日も、この日付だった。桜の盛りも過ぎ、花びらたちがそよ風に酔いどれる頃。季節の飽和状態の中で師の死を知った。平成八年四月十一日未明。

そうだ、十三年前の現在、上原先生は冥府へ入った。脳溢血で、苦しむ間もなかったらしい。が、今、私は確

信している。その一瞬かもしれない死活の中で、先生は原稿用紙五枚分ほどは思考しただろう。私たちへ、とい

うよりも、すべての若い生命たちへ、何事か語ったろう。

もはや原稿に起こせるわけもないが、ただしかし、断言できるのは、どうせ無茶な命令を出してきたに違いな

一九六八年 講談社

『神風』ベルナルド・ミロー著 内藤一郎訳 一九七二年 早川書房

『レイテ戦記（上・中・下）』大岡昇平 一九七四年 中公文庫

『万世特攻隊員の遺書』苗村七郎編 一九七六年 現代評論社

『別冊一億人の昭和史 特別攻撃隊』一九七九年 毎日新聞社

『別冊一億人の昭和史 学徒出陣』一九八一年 毎日新聞社

岩波文庫版『きけわだつみのこえ』日本戦没学生記念会編 一九八二年

『第二集 きけわだつみのこえ』日本戦没学生記念会編 一九八八年 岩波文庫

講談社文庫版『小説太平洋戦争（一）〜（九）』山岡荘八著 一九八七年

『知覧特別攻撃隊』村永薫編 一九八九年 ジャプラン『くちなしの花 ある戦歿学生の手記』宅嶋徳光著 一九九五年 光人社

ちくま学芸文庫版『虜人日記』小松真一著 二〇〇四年『日本はなぜ敗れるのか—敗因21カ条』山本七平 二〇〇四年 角川oneテーマ21

いということだ。

人間生活は心意伝承に左右されている。「個人の自由」など、思い違いもはなはだしい。そんな思い上がりからは何も得られない。生かされていることを知るべきだ。

本来自由とは、人間の生存にとって最も危険な状態のことではないか。何の保障も擁護もないのだ。自由こそ社会自身が忌避していることではないのか。そのくせ自由

を標榜するなど、支離滅裂もはなはだしい。自由だとか個性尊重だとか、そんな卑小浅薄なことよりも、我々が

いかにして生かされているかを問うべきだ。どのようにして命を輝かしているのか、どのようなことに意識が偏

執しているのか、個々人が死に変わり生まれ変わろうと

もどうしても伝えてしまっているのは何か、とことん問い詰めなければならない……

耳にたこがたまるほど聞かされてきた。わがままに甘ったれた自由主義や個性尊重論など、唾棄すべきものとののしっていた。だから、そんな上原先生が最後に命ず

るもつともいやらしい、いや、意地の悪い、ではなくて

厳しい命令は、絶対こうに決まっている。

虚空にさらされて 生きよ

(完)